

要約

本論文は「森のようちえん」の歴史を調べ、日本で行われている「森のようちえん」の可能性と課題を明らかにすることを目的とする。

「森の幼稚園」の始まりは1951年頃にデンマークのエラ・フラタウという主婦が自分の子ども4人を森に行き遊んでいたことだとされており、その後、デンマークやドイツを中心に世界中に広がった。論文ではまず二つの国での「森の幼稚園」の具体的な活動や理念、運営方法などを調べた。その結果、現在は既存園と森での生活を組み合わせて行っているところが多いことが分かった。具体的に4つの園の生活を取り上げ、自然や科学、ファンタジーを楽しみ、レッジョ・エミリアの教育も取り入れて、創造的な活動が営まれていることを理解した。

日本では「森のようちえん」とひらがな表記される。それは通常、「幼稚園」が示す3歳から5歳の幼児教育に限定されず、年齢もねらいも幅広い子育ての場であることからである。2007年に「森のようちえん全国ネットワーク」が認定され、現在は179施設が認定を受けており、多様な形態で活動している。

今回、もっと深く実態を知るために千葉県佐倉地域を中心に活動している自主保育“森のようちえん さくらんぼ”の活動に3か月、計7回参加させていただいた。毎回の活動は写真や分でドキュメンテーションとしてまとめた。子どもたちは広い森の中で伸び伸びと活動し、へびやバッタ、ザリガニを上手に捕まえたり、高い木に登ったり、そこにあるものから創造的な活動を次々とうみだすのを見た。また、彼らの言葉が実感にもとづき、とても豊かなことに驚いた。このような経験を通して筋力や柔軟性・平衡感覚・空間感覚が鍛えられるとともに、挑戦的な遊びの中での判断力や危険察知能力、粘り強さが養われ、子どもたち同士や様々な立場の大人との関わりの中で社会性や協調性が培われるのだと感じた。それは、OECDが提案している社会状況的スキルの獲得につながっているといえる。

また、活動に参加する保育者や保護者にアンケートやインタビューを行った。活動に参加する中で子どもたちの成長する姿を喜ぶとともに、保護者自身が子育ての楽しさを感じ、自分自身の人間関係が広がり、精神的余裕が生まれたことを感じられる記述もあった。

課題としては行政からの支援、無償化の要求が最も強く、組織の中で起こりうるリスクマネジメントの必要性も挙げられていた。

個人インタビューに答えてくださった方からはクラウドファンディングなどで支援を求め、独自性を維持しながら多くの方に魅力を伝え、移住につながればとの話をうかがった。

インタビューやアンケートには多くの魅力とともに課題も挙がったが、今の自分では理解しきれないものも多かった。これから保育士として働きながら、ここで学んだことを活かし、考え続けていきたい。